

井上宗和

正保城絵図顛末

日本築城ものがたり

しょうほうしろえずてんまつ



井上宗和

正保城絵図顛末

日本築城ものがたり

文藝春秋

著者略歴

1924年、愛媛県生まれ。1943年、日本大学拓殖科卒業後、雑誌社勤務を経てフリーの執筆生活に入り、城郭、ワイン研究の第一人者として、又、写真家として幅広い活動が続けている。著書は「戦国の武将と城」「戦国の名城と武将たち」「日本の城」「ヨーロッパ古城物語」「ヨーロッパの城」「ワインの旅」「ワインものがたり」「築城三代」(小説)など多数。

正保城絵図顛末

一九八九年二月二十日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 井上宗和

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)二六五一一二一

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 凸版印刷

製本 大く製本

万一、落丁・乱丁の場合は

お取替致します

© MuneKazu Inoue 1989

Printed in Japan

ISBN 4-16-310780-0

目次

はじめに

5

防人の来たり去り行くとき

7

静勝軒の記

65

弾正星異聞

87

静謐の城

115

金銀天守物語

149

大高坂山の抄

175

正保城絵図顛末

199

山鹿流秘法帳

231

正保城絵図顛末

（日本築城ものがたり）

装幀 高麗隆彦

「松本城・大天守最上層妻破風詳細図」を使用した。
(新人物往来社刊「図説百科『日本名城図鑑』より転載)

はじめに

城はいつの時代にも歴史の中心であった。

城を舞台として躍動した人たち、城造りに従った人たちの思考と行動は、謎と秘密に包まれていることが多く、ときとして誤っても伝えられている。

史料はあるときは真実を伝え、またあるときは意図をもって捏造されていることもある。

城の史実を調べるとき、多くの不可解な事実にぶつかる。そして史料の限界の壁が、人の侵入をはばむとき、それより先は想像と推理の世界である。

この一連の城にかかわる物語は、史実から切り離され、あまり伝承も記録もない有名、無名の人物群像の蠢きを、深い霧に包まれた歴史の谷間の中から拾い出した小説である。

防人の来たり去り行くとき

——大野城築城の記

「このような山のすがたは、茨城にもある。だがこの大きな山を、すべて城にするといいのだから驚いたものだ。何という大きな城を造るのだろう。海の向うから攻めて来る敵に備えてのことと聞いた。とすれば敵というのはよほどの大軍ということになるな」

茨城の北方きたかたの勝男かつおが、一休みしている四、五人の男たちに話しかけるようにいった。大きな声なので皆が勝男のほうを見た。

「そうよな、おれたちは徴用され関東からこの九州に連れてこられた。防人さきもりというから戦のため
の備えかと思っていたら、城造りの人夫が日々のつとめだ。もっとも人手が足りないから城が
来上るまでの土掘り、土盛りの仕事というが、これほどの大きな城、いつ出来上ることかなあ」
安房あわの鹿海しかうみの勝魚かつおがつぶやくようにいった。

勝男と勝魚は二人とも同じ隊である。

大宰府にいた軍団の防人は、軍務に必要な人員以外すべて城造りにかかわっていた。ほかに労
役として駆り出されたこの地方の者が二千人ほど、労金かせぎに集まった者が千人ほどいる。

大和朝の北九州都府である大宰府とこの地方を守るため、都府の後にある大野山に築城の命が
発せられたのは、天智称制四年（六六五）八月のことであった。もっともこれは正規の発令であっ
て、大野城築城はその二年ほど前に決定されていた。

おそらく日本列島はじまって以来の、この大きな城造りが行なわれるいきさつについては、防
人たちの話をしばらくおき、当時日本列島の関東、中部、関西、中国、四国、そして北九州を支

配していた大和朝廷と密接な関係にあった、朝鮮半島の激動の政情をふり返ってみなければなら
ない。

「百済くだらの都、泗沘しひが新羅しらぎと唐の連合軍により攻められ落城いたしました。百済王義慈ぎじと太子隆りゅうは
捕えられ、唐の都洛陽に送られました」

天豐財重あめとよたからいかしひたうしめすめらふこと日足姫天皇ひつひめすめらふこと、（後に諡号おくりなして齐明天皇）の飛鳥岡本の宮にこの報らせがとどいたのが

齐明帝六年、紀元六六〇年、唐暦でいえば高宗こうそうの顯慶五年のことである。

文帝齐明は直そていちに開別ひらかすわ、すなわち中大兄皇子なかのおえのみこはじめ重臣を呼び集めた。

「唐軍は蘇定方そていほうを大将とする十三万の兵、軍船を連ね百済の南に上陸、西に進んだ新羅の軍と合
流して泗沘を攻め落した。蘇定方は本国に凱旋するとき百済王義慈と太子隆をともなった。唐は
泗沘に副將軍劉仁願りゅうじんがんをとどめ、占領地を守っている。しかし百済国の官民は地方に起たつて唐と新
羅の軍と戦っている。とくに佐平、鬼室福信きしつふくしんは大和に人質として来ている百済王子豊璋ほうしやうを迎えて
再び国を興したいといい、わが国に援けを求めている。いかがしたものかみなに聞きたい」

百済と深いつながりをもつ大和朝には、この泗沘落城の知らせ以前にも、刻々と百済危機の報
告は入っていたし、援軍の要請も来ていた。

古くから大和地方に住みついていた百済系の集落からは、私的な援軍が数百人単位で出発して
いた。なかには大和朝の下級官吏も密かに加わっていた。しかし大和朝はまだ折りにふれて動揺

の治まらぬ南九州や、蝦夷の勢力の強い関東以北の経営に力を注がねばならず、それに国内の旧来の豪族である外^{きま}つ臣^{おみ}たちの向背も全く定まったとはいえず、大軍を組織して百済を援けるまでにはいたらなかった。

しかし朝鮮半島の情勢は、いまや急をつげているのである。

斉明帝は決断しかねていた。

大和朝はもと朝鮮半島とのつながりが深く、かつては半島南部に任^{みまな}那という領域さえもついていた。半島の政情によっては度々出兵もしていた。いまは当然百済を援けねばならぬことはわかつているのだが、出兵の費用や、国内政情についての懸念も大きい。

「わが大和と百済はもとより親しい関係にあります。この際多少の内政上の問題はあるにせよ、あるいはいくつかの政策が停頓するにせよ、ここは百済救援のための軍を出征させるべきと思います。百済の王子豊璋は直ちに勇武の武人たちをつけ百済に送り返し、百済再興の主柱とすべきかと存じます」

中大兄は明確に女帝に言上した。

中大兄はいうまでもなく大和朝の中でも第一の実力者である。皇子の母である女帝にも信頼され、庶政をまかされている。朝臣^{あそん}たちも中大兄の権勢とその行動力を認めていた。

「皇子の申されること、もっともとは存じます。しかしこの度の百済敗戦の重大な要因は単に隣国・新羅の侵略のみによるものではなく、先の推古帝の御世に隋に代って興りました唐国が新羅

の強い後だてとなっており。従って大きな意味をもちますのは新羅を援ける唐の意向や唐が派兵した軍事力だと思えます。これを知ることが、すべてを決する基となりましょう」

蘇我赤兄が少し進み出ていった。

赤兄は中大兄の大化の新政のとき、右大臣となった蘇我石川麻呂の弟である。石川麻呂はそのち異母弟の蘇我日向から反逆の心ありと密告され、自刃しているが、それは事実ではなく、これを信じて石川麻呂を自刃に追込んだ中大兄は、そのことを深く後悔したと伝えられていた。

赤兄は密告した蘇我日向の兄であり、朝廷での実力者だが、彼ものちに孝徳帝の子有間皇子が斉明帝に謀反の行動ありと、帝に密告し、有間皇子は絞首された。謀反が防がれた功によって一応は重用されている。毀誉褒貶の多い人柄だが、しかしこのとき赤兄のこの言上はもつとも思われた。

赤兄の発言には次のような背景がある。

六十年余り前の推古帝八年（六〇〇）のことである。

大和朝は当時大陸に栄えていた隋に使者を遣わした。ただしこのことはわが国の資料には『日本書紀』はじめ全く記録がない。

『隋書』東夷伝に隋暦開皇二十年（六〇〇）、倭王阿每、多利思比孤が長安の都にある高祖文帝に使者を送ったという。しかしこれは大和朝の正規の使者ではなく、北九州の豪族、王を名乗った者の使者であると、のちの国学者本居宣長などはいっている。この真偽はわからないが、大和朝

よりの正式の遣隋使の第一回は、推古帝十五年（六〇七）の小野妹子たちであった。

遣隋使の目的はいろいろあった。国交、文化の吸収など、その中の重要なものに隋の朝鮮半島への進出を探ることもあった。大和朝が朝鮮半島に支配領域をもっていたからである。

当時朝鮮半島は三国が鼎立していた。すなわち高句麗、新羅、百済である。

大和朝の前身ともいべき時代、そして紀元三〇〇年代の半ばに統一の王朝となつたころ、大和朝はその盛んな勢いをもって朝鮮半島に出兵し、任那という領域をもち、三九一年には百済、新羅をも服属させていたことが、高句麗の好太王碑にも見えている。

こののちも大和朝は伝統的に朝鮮半島の權益を重視したが、五六二年には任那が新羅のため滅ぼされた。大和朝はこの復旧を狙っていた。

中国に興亡した諸王朝も朝鮮半島に支配の手を伸ばそうとしたので、半島での權益の回復を計る大和朝としては、常に中国大陸の王朝の動きを知りたかつたのである。

推古帝の二十六年（六一八）、大陸では隋が滅び唐が興つた。

舒明帝二年（六三〇）、大和朝ははじめての遣唐使を長安の都に送つた。犬上御田鍬の一行である。こののち唐との国交は続いているが、唐は太宗の代になると新羅の金春秋の願いを入れ、大軍を朝鮮半島に送つた。

大和朝と唐、そして百済、新羅の關係は複雑であつた。

従つて百済の全面的援助は唐と事を構えることともなり、慎重を期さざるを得ない。

中大兄は、ほか二、三の重臣の發言を聞いたのち、中臣鎌子なかとしかぎに質ねた。

「鎌子はどのように思うか」

中臣鎌子は大化の新政のかげの立役者である。しかし常にあまり表には出ない。中大兄の信任は第一で、人々は鎌子が当然のように官位一等の左大臣になるものと思つていたのだが、左大臣、右大臣より下の内臣うちのおみの位に就いた（賜姓され、藤原鎌足となるのはずっと後のことである）。

鎌足はつつしんで答えた。

「わが大和朝と百済の間柄は常に密接でありました。いろいろと問題はありますが、この際、百済を助け、軍を送ることがまつりごとの正道かと考えます。しかし、これは唐や新羅と事を構えるということではなく、外交的手段によって両国との關係を調整いたします。また朝鮮への出兵は、国民の目を外にも向け、挙国一致の体制をもたします」

この發言はすでに中大兄と打合わせ済みのことである。今日の朝廷での議題は二人には昨夜の内に伝わっていた。

大和朝の百済救援は中大兄の思惑と鎌足のこの答弁で決められた。そしてこのことがその後の大和朝と日本列島にどのような運命をもたらすか、二人にさえ想像もつてはいなかった。

人質として大和に来ていた百済王子豊璋は、旬日を経ずして多額の黄金と武器、兵員を与えられ、従者とともに飛鳥の宮を出発、帰国の途についた。王子にしてみれば先の舒明帝三年（六三